

# 城下町 新聞

次回13日は「ほりま経済新聞」です

## 300年前の姿残す「船場の御坊さん」 令和の大修理、で新発見

「船場の御坊さん」が、令和の大修理、真ただ中にある。300年前の姿をとどめる船場本徳寺（姫路市地内町）。修理が進む大玄関では、建立年を裏付ける発見もあったという。大石内蔵助や明治天皇、ドイツ人捕虜まで、寺ゆかりの

人物が幅広い古刹。近年は、地元住民らが魅力発信に一役買っている。目指すは、船場御坊と姫路城、姫路駅を結んだ「三角地帯」の活性化だとか。周遊観光ルートの誕生に、大修理が追い風となる!? (段 貴則)

### 大玄関、1747年建立裏付け



瓦などが取り外された大玄関の唐破風=いずれも船場本徳寺

### 「延享四年」の墨書確認

天井の板支える「竿縁」の裏側



「延享四年」の墨書が記された竿縁

船場本徳寺の「御修復事業」は2018年10月に始まった。いずれも姫路市指定重要有形文化財

化財の大玄関(1747年建立)と表門(17世紀中期建立)、本堂(1718年ごろ建立)の順で修復。総事業費20億円超を投じ、2032年まで続く大プロジェクトだ。

現在、修復に取りかかっているのが、建立から約270年を経た大玄関。戦前、寺の火災で大玄関とつながる庫裏部分は焼けたが、大玄関は無事だった。



中根さんは「本堂の階段のすり減りなどには、寺を訪れた人々の300年分の願いが刻まれている。14年間の大仕事をやり遂げ、次の300年へ寺をつな

ぎたい」と話している。



大石内蔵助、明治天皇、ドイツ人捕虜…ゆかりの人物幅広く  
船場本徳寺が、この地に寺を開いて400年。イチヨウの木を赤穂義士・大石内蔵助が贈った、とされる逸話が伝わるなど、境内には、長い歴史ゆえの史跡が多い。  
1885年、明治天皇が西国行幸の際に滞在した書院は「一行在所」と呼ばれるようになった。戦前の火災で一部焼損したが、修復。瀟洒なたたずまいで金の間、銀の間に分かれ、玉座も江戸末期に書院として建てられた行在所

残っている。2018年に国の登録有形文化財(建造物)となった。  
また境内には、幕末の勤皇志士の墓に加え、西郷隆盛が決起した西南の役(1877年)で戦い、なくなった兵の霊を弔う供養碑が建てられている。  
さらに第1次世界大戦の際、捕虜が収容されていた名残もある。ドイツ軍捕虜が故郷の古城の風景を思いながら造ったとされる「捕虜望郷塚」を見ると、姫路城を眺め、望郷の念を強めたであろう捕虜たちの姿が目に見えらる。



細部まで細かく造り込まれた捕虜望郷塚



300年の歴史を刻んできた本堂

**船場本徳寺 真宗大谷派姫路船場別院**  
本徳寺。1492年、現在の姫路市飾磨区英賀で布教を始めた。羽柴秀吉の播磨侵攻で英賀城が落ち、姫路・龜山に移転させられた。本願寺の東西分派を経て、姫路藩主となった本多忠政が1618年、姫路・船場の土地を寄進し、本堂建立の落慶法要が営まれ、船場本徳寺が創立。1718年ごろに現在の本堂が再建され、十七間四面の大伽藍が完成した。自然災害や戦災を免れ、今に残る。2006年に本堂と表門、鐘楼、大玄関の4棟が姫路市重要文化財に指定された。

### 寺、城、駅結ぶ三角形 観光地に 地元NPO

「昭和30年代の船場本徳寺はにぎやかだった。大玄関がある建物も幼稚園の教室になっていて、私も通っていましたよ」と話すのは、船場本徳寺近くに1級建築士事務所を構える中山栄一郎さん(64)。NPO法人「歴史と出会えるまちづくり船場・

城西の会」で副理事長を務めている。同法人は、姫路城の西側にある船場・城西地区の住民らで結成。船場本徳寺の魅力幅広く知ってもらおうと、本堂でコンサートを開いたり、境内で手作りの菓子や小物を集めた「船場御坊楽市」を年間5回開いた

りしてきた。  
中山さんは「姫路駅からお城が見えるため、観光客が直線的にしか移動しない」と指摘。船場本徳寺と城、駅を結べば三角形ができるため「丸1日、姫路で滞在できる周遊観光エリアになるよう、船場本徳寺周辺の史跡を含めたマップ作りを続けたい」と話している。